

展勝地風土記

Vol.36

令和3年7月21日

展勝地開園100周年記念事業実行委員会
問い合わせ／北上市都市整備部都市計画課 ☎72-8279

展勝地開園100周年記念事業実行委員会、100周年に向けた取り組みとして、より多くの市民に展勝地を知っていただくため、展勝地に関するさまざまな情報を紹介しています。歴史のこと、地理的なこと、自然環境のこと、そして、展勝地に深く関わった人々や展勝地を題材にした美術・文芸作品などについて紹介していきます。今回は令和3年10月22日に発行します。

藩境の歴史とともに

北上市立博物館

はじめに

北上市は、南部領と伊達領の一部から成り立つ、江戸時代の藩境のまちである。当市と金ヶ崎町の約11キロに及ぶ地域には、境界を示す2基の挟塚と15基の大塚をはじめ多数の塚が現存しており、当時の政治的緊張状況を示すものとして国の史跡に指定されている。

。今回は、藩境確定までに約半世紀もの歳月を要した歴史と、展勝地周辺に関わる藩境の状況や事件に注目して、当時の様相の一端を見ていきたい。

藩境確定までの歴史

1590(天正18)年、豊臣秀吉は諸大名に動員をかけて小田原の北条氏を滅ぼす。しかし、北上川中流域を治めていた和賀氏や葛西氏はこれに参加しなかったため、秀吉に所領を没収されてしまう。その結果、混乱した同地域を与えられたのが南部氏と伊達氏である。この時点から明確に境界が位置付けられるまで52年の歳月が流れていく。

当初の境界は、従来の郡を単位とする行政区画を大きく変更した

ものであり、具体的な線引きもされていなかった。旧北上市史の藩境資料を収録した巻の前言では「当初、南部氏とすれば和賀氏の領を与えられたと思っていたし、伊達氏とすれば旧江刺郡を与えられたと思っていたことにも領境争論の原因がある」と述べている。この境界には、当初から紛争が生じる火種が内包されていたのである。

実際、境界が確定するまでに、いくつもの紛争が生じている。例えば、1621(元和7)年、伊達領側の役人が岩崎・鬼柳方面の検地に入った一件、1628(寛永5)年、遠野・小友村の金山に伊達領側が越境した一件、1631(寛永8)年、藩境の起点・駒ヶ岳山頂のお駒堂を、南部領側への合議なく伊達領側が無断で建て替えてし

まった一件などが挙げられる。これらの事例では、いずれも南部領側が伊達領側に抗議をしている。

こうした紛争が絶えなかった中で、最終的には幕府の仲裁で、1641(寛永18)年に明確な境界が定められ、翌年には境界が築かれて、約半世紀に及ぶ境界争いが決着することとなった。駒ヶ岳山頂(1129・8)から太平洋の唐丹湾(釜石市)まで、実に約130キロに及ぶ境界線上に大小の塚が築かれていった。

藩境の往来

展勝地桜並木の対岸には、盛岡藩最大の川港があり、珊瑚橋付近では川岸・立花間を結ぶ渡し船が往来していた。盛岡藩家老席日記「雑書」の1728(享保13)年の



市内の藩境ライン

記事を見ると、夜に紛れて伊達領側に向かう川船を発見し、藩に通報した者には褒美を出すことや、川岸から立花に向けた夜の渡船を禁止する通達の控えが残っている。江戸時代の中頃にもなると、物資輸送のターミナルであった黒沢尻河岸では、藩の許可を得ない商品作物の他領移出や、他領の人々との密かな交流も少なからずあったであろう。



市内にあった番所位置図

また、展勝地の裏千本付近には、立花(南部領)と岩谷堂(伊達領)を結ぶ道が通っており、立花と下門岡には番所が設置されていた。及川大溪氏の論考によれば「立花から下門岡を経て岩谷堂に通ずる路は(中略)監視も厳しからず、恰も一種の抜道の観を呈し、この抜道

を通じて人馬や物資の交流、集散が行なわれていた」という。182

8(文政11)年、江戸深川の富本繁

太夫という旅芸人は、岩谷堂から

南部領に入る際、ありふれた名では人々が驚かないとして、大胆に

「豊後大掾衆秀」という偽名を名乗ってこのルートを通り、黒沢尻

で寄席興行をしている(繁太夫著『筆まかせ』)。ちなみに、後に盛岡

で偽名であることが明らかとなり、繁太夫は肩身の狭い思いをしている。また、1785(天明5)年、

紀行家・菅江真澄も、黒沢尻からわざわざ北上川を渡り、このルート

を通じて伊達領に入っている。展勝地周辺の藩境をまたぐ陸と川

の道では、参勤交代の道であった奥州街道とは異なる光景が広がっ



みちのく民俗村内に移築復元された寺坂番所(市指定文化財)。寺坂番所は下門岡に設置されていた伊達領側の番所である

ていたのかもしれない。

藩境を守る

みちのく民俗村内には、藩境となっていた間沢(まきさわ)が流れており、挟

塚が現存している。花巻城代日誌の1834(天保5)年の記事を見

ると、間沢の堰が伊達領の者によって南部領側に寄せられて田にされ

ていた一件が記されている。藩境を見回りしていた御境古人(おきかいこじん)が発見

し、南部領の役人と骨を折って交渉し、原状回復させて示談にした

顛末の一部始終である。示談になった案件ではあるが、かつて南部・

伊達領双方で話し合い決定した、ほかでもない特別な境界に関する

ことなので、花巻城のトップである城代まで内々に報告された旨が

強調されている。先に見た紛争では利権をめぐる駆け引きが見え隠



みちのく民俗村内に現存する間沢挟塚(国指定史跡)

れしていたが、この事例にそうした背景は見られない。天保の大飢饉のさなかでもあり、藩境といえども田にできるのであれば開拓して、少しでも食糧を得ようとする庶民のたくましさを感じられる。

それでも国と国の境は、厳然と守られるべき場所であったのだということを、この事例は物語っている。

おわりに

今回は、藩境が確定する江戸時代前期までの概要と、他領との往来が盛んになっていたであろう江戸時代中期の様相、そして江戸時代後期における旅人の足跡や事件を通して、展勝地周辺に関わる藩境の諸相を駆け足でめぐってみた。両藩の人々が境塚を大切に守ってきただけではなく、時代が変わっても脈々と守り続ける人々がいるからこそ、当市では当時のままの境塚をいくつも目にすることができる。フィールドを訪ねるとともに、周辺の歴史を様々な角度から探ることで、まだまだ藩境についての発見ができそうである。